

Title	政治学科開設七十周年に際して
Sub Title	
Author	潮田, 江次(Ushioda, Koji)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1968
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology ). Vol.41, No.5 (1968. 5) ,p.11- 14
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	法学部政治学科開設七十周年記念論文集
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19680515--011">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19680515--011</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 政治学科開設七十周年に際して

法学部政治学科の開設七十周年を記念し、専任者一同で論文集を出すことになつた。やむを得ない事情で執筆できなかった者もあるが、却つてその為に一冊におさまりがついたとも申せる盛況である。昭和四十三年四月現在、教授十三、助教授十二、専任講師二、助手四名を数える。顧みて転た今昔の感に堪えないと共に、ここまで育て上げられた先輩諸先生の御努力を今更のように貴く懐いかえすのである。

塾の大学で、それ迄あつた法科・文科・理財科のほかに新しく政治科を設けることになつたのは明治三十一年である。学内の大層な評判で、当時の俊才は挙つてこの新設学部へ入つた。後に塾に残つて塾の学問を築き上げた板倉卓造・高橋誠一郎・小泉信三等の諸先生は、いずれも政治科出身である。しかし、これでも想像できるように、当初は「政治科」と名告つていても、教科目には余り政治科らしい特色はなく、また教員にも殆ど塾出身者の名は見当らなかつた。明治三十六年度の記録を見ると、法学博士、有賀長雄「政治史」のほか、同、木場貞長「政治学」というのが載つており、また蔵原惟郭が Buntschii の英訳 The Theory of the State を使つて「国家学」を講義したことも

あるらしいが、塾の第一回留學生として明治三十八年に帰朝された林毅陸先生が「外交史」を担当されたことで、漸く政治科らしく、また慶應の政治科らしくなり、次で明治四十年に田中幸一郎先生が帰朝されて、「列国政治史」と「政治学」の講義を受持たれたことで、一段とそれが進められたのである。林先生は後年に至つても穩かながら音吐朗々と名調子の講義をされたが、若い頃は中々血氣盛んだつたと聞くので、さぞかし華かな熱弁が聞かれたことと推察される。田中先生は間もなく専門の政治史だけの担任になられたけれども、本科のドイツ語には *Stier-Somlo* の *Politik* などを使われたし、われわれ學生に向つて *Bentley* の *The Process of Government* を推奨されたのも先生だし、「法学研究」が創刊されると、そこで *Laski* の多元主義國家論を紹介論評されるという風に、理論方面の新説や新著に対しても絶えず関心を寄せ、注意を喚起された。また大正デモクラシーの氣勢盛んな酣に *wach Mallock* 等を引合いに冷水を浴びせかけ、反動學者扱いをされたが、われわれには「私だつて何もデモクラシーに反対じゃありませんよ。唯あんまり世間がデモクラシー、デモクラシーと言うから、ちょっと書いてやつたんで……」と笑つておられた。先生の政治史の講義は、盛り沢山な材料を早口で雑然と（と少くともわれわれ學生には感じられた）述べて立てられるので、夢中であつたノートを、あとから読んで全体の筋道を立てるのに苦勞したことを覚えてゐる。史學家としての先生の名声は既に定まつてゐるが、それよりもわれわれにとつては政治学の面で先生が後進に示唆と刺激を与え、研究意欲をそそられたその功績も決して僅少でないことを、この機会に特に記して置きたい。

大学の各科に主任が置かれたのが明治四十三年で、林先生が政治科の主任になり、又その年から新帰朝の板倉卓造

先生が「国際公法」と共に「政治学」を担当されることになり、はじめて政治科らしい政治科の基礎が確立された。板倉先生は政治科出身の政治科の先生で最初の人であり、又その長い擁まぬ指導と努力と薫陶によつて今日の盛大な——単に学術面だけでなく、そのモラル・バックボーンに於て——政治学科を築き上げられた大功労者である。学位は国際法で取られたのであるが、その政治学は英国流の憲政の常道原理を見事に体得され、実地に當つて明快適確な判断を下される。また教室で使う英書は恰も和文を読み下すかのように淀みなく之を訳読し、その間に巧妙適切に内外の実例・逸話を挿んで、思わず聴き入らせる。かつて石田新太郎監事が感服されたように、全く「天下一品の教授法」であり、大きな説得力と感化力を示された。夏期巡回講演の板倉先生の話を聞いた地方の或る町で、それまで烈しく対立抗争を続けていた人々が忽ち和解して手を握り合つたという実話もあるし、政界・操觚界の長老達が先生の噂をする時に「板倉先生」と呼んでいるのを聞いたこともあり、先生の言説は聴く人におのずから尊敬の念を起させる何かの権威を持っていた。先生の巧みな話術と説得力をも含めて結局すべてが本物の政治学の確信に基いていたからであらう。

板倉先生に力をあわせて塾の政治学科を今日あらしめることに貢献した其後の先生がた、殊に故人の先生がたについて茲に一々述べる事が出来ないのは誠に残念であるが、そのお蔭で政治学科の主要科目の担任は、恐らく水野練太郎（市政論）、美濃部達吉（憲法・行政法）等の諸先生を最後にして、総て塾出身の教授で立派に引受けて行けるようになったばかりか、今はその他の科目に亘つても同様であり、又しばしば時代に即応した科目を新設して他大学に先

鞭をつけることさえする勢いである。政治学科の此の飛躍的な発展は、あまり他に類例を見ないものであり、われわれの心から喜び、且つ誇りとするところである。しかし翻つて考えてみれば、そこには又それで固有の弊害も必ず伴つて来るもので、常に戒慎を怠つてはならないことである。塾の学者養成にあれほど尽瘁された板倉先生御自身がある年には、外から学者を迎えて新しい血を入れることの緊要性を強く唱えられた。十分考えなければならぬ事である。そのほか今後の事としては、講義や学習科目の充実をはかるについて、一層全体的・計画的にその均衡按配を考へて進めることであろう。それにつけても、新しい教員は一人一人何か新しい科目を担当するのではなく、二人、三人が同一科目を専攻し担当するという考なども、学生数の激増に対応して寧ろ当然うまれて来るものと申せよう。政治学科の諸君が伝統のモラルを高く堅持して、先輩・同僚の努力によつて築き上げられた此の殿堂に愈々輝きを加えて行かれることを、私は期待し信ずるものである。

昭和四十三年四月十日

潮 田 江 次